



Original Story アトリエかぐや
[Berkshire Yorkshire]

Novelization 岡田留奈

Original Illustration Chocochip

■はじめに

本作は原作ゲームを元に創作した短編作品集です。各章のお話はパラレルワールドで構成されており、それぞれの舞台設定は異なります。あらかじめご了承ください、お楽しみください。

第1話 白衣の恋人 5

第2話 とあるナースの平凡な一日 61

第3話 植松さんの憂鬱 93

第4話 ポセイドンの罨 145

エピローグ 195

《第 1 話》
白衣の恋人

Chapter-1 Rei's Story



夏川東病院での研修医生活が終了してから、はや数年――。

俺、長山功は無事医大を卒業し、現在は研究医として一般内科の修行を積んでいる。なにかと目をかけてもらっていた大学教授の取り計らいで、ここ「すめらぎ医院」に世話になることになったのだ。

半人前だった研修医時代とは違い、研究医はひとまず一人前として認められている立場だ。それなりに責任も大きいが、やり甲斐ももちろんある。「夏川東病院」にいた時はペーペーだった俺にも、いまや後輩ができちゃったりなんかして、充実したドクターライフをエンジョイしているのだった。

「……つまり、濾過しないはずの蛋白質が腎臓の糸球体を濾過してしまうことよって引き起こされる。それがネフローゼ症候群ですね？ 先生」

「へ？」

ほんやりとしていた俺の思考を、彼女の声が断絶する。正確に言うと、ほんやりと彼女の太腿を凝視していた俺を、だ。

「先生、私の話聞いてました？」

「あ、ああ。……なんだっけ？」

「もう！ やっぱり聞いてないしー」

唇を尖らせ、彼女はゆっくりと脚を組み替えた。ミニスカートから伸びる太腿は白く

なめらかで、見事な脚線美を誇っている。背はそれほど高くはないが、スタイルだけ見ればモデル並みだ。さすがの俺も、まさか彼女がここまで美しく成長するとは思わなかったのだ。

「ねえ先生、今ドコ見てたんですか？」

アーモンド型の瞳がいたずらっぽく俺を覗き見る。ぷにぷにと柔らかそうな頬。キスでも誘っているのかと勘違いしてしまいそうになるほど、おいしそうに艶めく唇。

「ね、ドコ見てたんですかー？」

「うっ……」

この娘は、と俺は思う。わかっててわざと聞いてくるのだ。

「滯……じゃなかった、緋山先生」

「はいっ？」

「えー、研修を再開します」

「あ、ずるい！ はぐらかした」

俺はカルテに視線を戻し、平静を装った。からかわれて動揺するほど経験値が低いわけじゃない。たとえ相手が、年下の恋人だったとしても、だ。

緋山滯。

すめらぎ医院の研修医——でもって、俺の恋人。

かつて俺と滯は、研修医とその受け持ちの患者という間柄だった。研修先の夏川東病院で出会い、少しずつ仲良くなつて……あんなことやこんなことをしたりして、まあそういう関係になつて。

やがて滯が医大に進学し、お互い忙しくなつてしばらく連絡を取り合わない日々が続いた。

果たしてこれが恋人同士と呼べる関係なのか？ との疑問を持ち始めたちようどその頃。なんと滯が、研修医として俺の勤務先にやつて来たのだ。朝イチで院長先生から滯を紹介された時は、日頃の疲れが溜まりすぎて幻覚を見たのかと思つたぐらいだ。

滯はあくまでも「偶然」だと言いはるが、俺はかなり怪しいと睨んでゐる。が、どちらにせよ真偽を確かめる術もなく、滯の研修医生活はスタートしたのだった。

それにしても……。

患者に手を出すなんて鬼畜な医者だ、と自分でも思う。初めて出会つた頃の滯はまだ思春期真っ盛りの子供で、危うい雰囲気を漂わせていた。身体の成長スピードに心が追いつかず、いつもなにかに対してイラついていて、エネルギーを発散させる場所を求めていたように思う。

そんな彼女と俺は、院内では比較的年齢が近いこともあつたからかどうなのか、わりとすぐに打ち解けた。俺の親戚で、夏川東病院の外科医でもある司姉つかさねいわく、「あの気難し

「子をよく手なずけたわねえ。前の担当医なんてすぐに匙さじを投げたのに」とのこと。
別に俺は、滯の心を開くためになにか特別なことをしたわけじゃない。滯と男女の関係になった今でも、なぜ彼女が俺を気に入ってくれたのか、実はよくわからないでいる。

「……ここまでで、なにか質問は？」

その日、俺と滯はいつものように診察室で研修を行っていた。本日の研修内容は、女性特有の疾患におけるプライマリ・ケア。要するに、婦人科の知識を広く浅く修得しときましようっていう内容だ。

「よく女性患者から、マンモグラフィは痛そうだから怖い、という意見を聞くんです。不安がっている患者さんに対して、先生だったらどんなふうに説明しますか？」

「うーん、そうだなあ」

マンモグラフィとは、乳房のX線撮影を行う機械のことだ。主に乳がん検査などに使用されるのだが、その際にアクリル板のようなもので乳房を挟まなければならない。つってもそれほど強い力を加えるわけではないので、そんなに怖いものじゃない。俺は体験したことがないので、どれくらいか痛みを伴うものかはよくわからんが。

「確かに、生理前などで乳房が張っている時は痛みを感じることもあるかもしれないな。

でも、実際は痛みを訴える人ってそれほど多くないんだ。やってみると、なーんだこんなもんなんだってという人の方が多い……ってことを、そのまま伝えるかな。俺だったら」

「ふむふむ、なるほど」

滯は真面目な顔つきでメモを取っていく。鼠^{ひい}鼠^き目に見ているわけではないのだが、滯は至って優秀な後輩だった。一度教えたことはすぐに覚えて、次の研修でしっかりと活かそうとする。

「滯……じゃなかった、緋山先生は呑み込みが早いな。この分だと、ローテートは問題なく終わりそうだ」

「先生の教え方がいいからです。さすが、すめらぎ医院のホープですよね」

「こら、からかうなよ。俺だって、上級医の先生についてもらってやっとなんだからさ」

「からかってなんかないですよ」

そう言って、滯はぐいっと顔を近づけてきた。だから、研修中は無意味に接近するなど言ってるだろーが。ただでさえ狭い診察室で、二人きりだというのに。

「ねえ先生」

「……なんだよ」

「お願いがあるんですけど」

「却下」

俺はにべもなく即答した。こういうふうには滞が迫ってくる時のお願い事は、だいたい口クなものじゃないとわかっている。

「なんでー？」

「なんでー、じゃないっつーの。どーせあれだろ？ 珍しい症例を回してほしい、とかそんなのだろ？ 言っとくけど俺は研究医だし、この病院で権限なんてないんだぞ」

研修医は当然、経験を積むためにできるだけ多くの症例に立ち会おうとする。それが珍しい症例であればなおさらで、研修医の多く集まる病院では症例の奪い合いになる場合も少なくないのだ。

もつとも、スーパーローテート研修が導入されてからは研修医の売手市場となり、できるだけ条件のいい（休みがしっかり確保できて給料のいい）都会の病院に人が集まるようになった。症例の多さなど二の次だといふ輩やからも多いようだが、少なくとも滞はそういったタイプの研修医ではない。

「違いますよ。復習したい項目があるんです。先生に手伝ってもらいたくて」

「ああ、そういうことか。だったらお安い御用だ。この俺に手伝えることならなんでもするけど」

「よかった。先生ならそう言ってくれると思った」

そう言って、滞は目を細めた。普段はツンツンしてるように見える彼女だが、笑うと急

に幼い表情になるのだ。

「じゃ、先生。ズボン脱いでもらえますか？」

笑顔をキープしたまま、そんなことを言う。

「ん？ どうしてだい？」

「どうしてって、今から剃毛ていもうするからに決まってるじゃないですか」

「ははっ、そうか。剃毛の復習をしたかったのか」俺も瞬時にスマイルを浮かべた。「でも、なぜ俺が？」

「えー、だってこんなこと頼める人、先生しかいないし。私、カミソリ扱うの苦手なんですよ。他の人に実験台を頼んでもいいんですけど、もし失敗したら困るでしょ？」

「あー、なるほどね。はははは」

……って、おい。

どこから取り出してきたのか、滯の手にはすでにカミソリが握られている。どうやらマイカミソリらしい。

そーいや昔、夏川東病院で某ナースに剃毛されたことがあったなあ……などと懐かしく思い出していると、滯がおもむろに俺のベルトへと手を伸ばしてきた。

「こらこらこらこら」

いくらかわいい後輩の頼みとはいえ、世の中にはできることとできないことがある。す

かさずその手をつかんで制した。

「あらら、ダメですか？」

「あたりまえだろ。失敗する気マンマンのヤツに、俺の大事な下半身を預けられるか」

「えー。いつも預けてるくせにい」

思わせぶりの目で俺を見上げてくる。そ、そりゃあ確かに、別の意味ではいつも預けているわけなのだが、今はそーゆーことじゃなくて！

「とにかく、ダメ！ 悪いが他をあたってくれ」

「ふーん、そーですか。わかりました」

滲は拍子抜けするほどあっさりと引き下がった。マイカミソリをポケットにしまい、につこりと笑ってから立ち上がる。

「じゃあ、外科の橋先生たかはなにお願いすることにします」

「……は？」

聞き捨てならない発言だった。外科の橋先生といえ、三秒以上目を合わせると妊娠するという噂の、あの色男だ。

院内での女子人気は高く、ナースのみならず患者さんたちまでもが狙っていると聞く。しかも悪いことに、あの先生は節操がないのだ。どんなに年齢差があろうが、どんなに体重があろうが、どんな顔をしてようが、性別が男でさえなければ常時ウェルカムらしい。

「それはダメだ！」

俺は思わず立ち上がった。

「どーしてですか？ 他をあたれと言ったのは先生なのに」

「橘先生だけはダメだ。あの人は危険すぎる」

「危険って、どう危険なんですか？」

「そ、それは……」

「ふふふつ。先生、私のこと心配なんだ」

猫みたいな目が俺を射抜く。なんとも返事できなくて目をそらした。

ああもう、こんなに年下の子に動揺させられてしまうとは。昔は駆け引きの「か」の字も知らないような子供だったのに！

「ねえ先生、私どうしたらいいんですか？ 先生は剃毛させてくれないし、橘先生のところにも行っちゃダメだって言うし。これじゃ研修にならないんですけど」

「だ、だから、他に方法が……」

「他に方法って？」

ずずいっ。

濡は両腕でぐいっと胸を寄せながら、俺へとにじり寄る。深い深い谷間に目を奪われ、ナチュラルに金縛り状態。

って、ひるんでる場合じゃなかった。俺はもう、昔の俺とは違う。夏川東病院で女医たちにおもちゃにされていた頃の俺とは違うのだ。

「よ、よし、こうしよう」

俺は居住まいを直し、深呼吸をしてから平静を装った。研修医になりたての小娘に、イニシアティブを握られるわけにはいかない。

「俺が、代わりに手本を見せてやる」

「手本？」

「ああ、そうだ。実戦に移る前に正しいやり方を見ておいた方がいい。でないといけないから」

その小生意気な瞳を見返した。幸いなことに、今はちょうど暇な時間帯である。ゆっくりと先輩の妙技を伝授してあげることしよう。

「な……なんでこうなるんですか？」

分娩台に乗った濡は、さつきとはうって変わって恥ずかしそうに俺を見た。

それはそうだろう。パンツ丸出しの状態で、大きく脚を広げているのだ。俺は薄布一枚を隔てた濡の陰部と、至近距離で対峙していた。